専修寺親鸞講座②

2023/6/2

弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。
そのゆへは、罪悪深重、煩悩熾盛（しじょう）の衆生をたすけんがための願にまします。

（現代語訳）阿弥陀仏の本願は、老いも若きも善人も悪人もわけへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心が要であると心得なければなりません。なぜなら、【深く重い罪】を持ち、激しい煩悩をかかえて生きているものを救おうとしておこされた願いだからです。

1　「人知」と「仏智」の比較

①「人　知」・・・私たちが物心ついてこの方、習い覚えて身につけているのは、あくまで自分を是とし、自分の領域を守り、拡大し、増強する、自己肯定に立っている。当然のこととして、人知とは自分最高、自分優先、自分中心、自分絶対。もう少しくだいていえば、いつでも自分が正しい、自分は賢い、自分は善人。だから間違うのはお前、愚かなのは相手、悪人は向こう、と対向する。世の中はみんなそれで通っていると決めつけて疑わない。

②「仏　智　」・・・「ちがうぞ、そうでないぞ。その、自分か正しい、賢い、善人と、一切合財自己を肯定するのは、道理にはずれた、まちがったあり方、迷いの生き方。そこからさまざまの苦や争いが起きていることに、気付かなければならないぞ」。

2　知ることの難しさ

「自分のことは自分が一番知っている」と思い込んでいると、自分の生き方や心の在りようを改めて問うということはなかなかない。私たちには「自分の見たいように見る」ということがあるから、ありのままの自分を知るのは容易なことではない。私たちは教えという鏡を通すことで、はじめて自らの姿を知らされる。

3　凡夫とは一体どのような人のことを言うのか

凡夫とは、煩悩を身に具えていて、物事を正しく見る智慧の眼を持たない者のこと。例えば、欲望という煩悩に支配されている人は、どれだけ欲しい物を手に入れても満足しないという欲求不満の生活を生きることになる。また、怒りの煩悩に支配されている人は、他者と敵対し傷つけ合うという、心が休まることのない生活を生きることになる。このように煩悩によって苦しみながらも、そのことに気づかない者を凡夫という。

経教（きょうきょう）はこれを喩（たと）ふるに鏡のごとし。しばしば読みしばしば尋ぬれば、智慧を開発す。

善導大師『観経疏』序分義